

花ちゃんの海

奄美市立奄美小学校 三年 中野 まな

わたしは、オカヤドカリの女の子。わたしのせなかの貝に小さなお花みたいなのもようがついているので、花ちゃんと呼ばれている。白いすなはまのアダンの木の下で、青い海と空をながめながら、毎日くらししている。このキラキラした海を見ながら、お友だちとおしゃべりする時間が大きい。

「花ちゃん、ちょっとこれを見て。」

お友だちのあつくんがやってきました。あつくんのせ中のおうちがへんてこな形になっていて、びっくりして目をまるくしていると、

「前の家がせまくなつたから、ひっこしをしようと思つてさがしていたら、これを見つけたんだ。」

と、ちょっととくいげに見せてくれました。それは、きみどり色のペットボトルのふたでした。わたしは、前の細長い貝の家の方がかっこよかったです。なんだか動きにくそうと心の中で思ったけど、あつくんがうれしそうなので、

「色がきれいだね。にあっているよ。」

と言ったら、

「へへっ。また、だれかに見せに行こうかな。」

と、ますますうれしそう。そんなおしゃべりに、わたしたちがむ中になっていたその時、

「おかあさん。ぴかぴか光った貝が動いているよ。ジュースのふたも動いているよ。さわってもいい。」

小さな女の子が、大きな声でこつちをむいてはしゃいでいる。わたしたちはびっくりして、さつと自分の家の中にかくれて、どうしようとドキドキしながらじつとしていると、女の子のお母さんが、

「これはヤドカリさんたちだよ。びっくりしておうちの中に入っちゃったね。そつとしてあげようか。」

「うん。ヤドカリさん、びっくりさせてごめんね。」
そう言うと、小さな女の子は海の方へ走っていきました。

「あぶなかったなあ。やっぱりペットボトルのふたじやあ、目立ってしまうのかな。」

と、あつくんはがっかりした顔になりました。

「花ちゃん、ぼくは人間に見つかりにくい新しい家をさがしに行くね。じゃあ、またね。」

そう言うと、いそぎ足で行ってしまいました。

わたしは、昼間はこわいことがたくさんあるから気をつけるようにと、お父さんとお母さんにいつも言われていたのを思いだして、少しなみだが出そうになりました。

しばらくハマユウのねもとにかくれていると、さっきの女の子の声が聞こえてきました。

「ジューズのおうちのおうちはきつとせまいから、この貝がらをプレゼントしたいな。きつと気にいっておひっこしをしてくれるよ。」

と、さつきわたしたちを見つけたアダンの木の下にそつとおいてくれました。それは、しまもようのかっこいいまき貝でした。

「ヤドカリさん、おひっこしをしたから見にくるね。こんどは、びっくりさせないようにするね。ばいばい。」

小さい女の子は、お母さんと手をつないで帰って行きました。

女の子からのプレゼントに、あつくんはきつとびっくりするだろうな。こっちのおうちの方がにあうかな。早く教えたくて、わたしはうきうきした気もちになりました。

すてきなことに出会えるこの海が、いつまでもこのままでありますように。

